



## 答え合わせ・解説

問1	答え 1 祭祀	青銅器である銅剣や銅矛は、鋭い刃を持ちながらも実用には適さない繊細なものも多く、主に祭祀の場で神聖な道具として使われました。これらを所有したり儀式を主導したりすることが、指導者の権威を高めることにつながりました。
問2	答え 2 光武帝	光武帝は、57年に九州の奴国から訪れた使者に対し、朝貢の返礼として金印を授けました。これは当時の中国が、周辺の地域の小国を支配下（冊封体制）に置こうとした外交政策の一環でした。
問3	答え 2 近畿地方	青銅器の中でも、銅剣・銅矛の文化圏と、銅鐸の文化圏は微妙に異なり、特に関西地方を中心に多くの出土が見られます。これは、当時のクニの間で文化的な交流や、あるいは対抗意識が存在していたことを示唆しています。
問4	答え 2 銅鐸	銅鐸は主に近畿地方を中心に多く出土しており、祭祀の道具として用いられました。当初は小型でしたが、時代が進むにつれて大型化し、表面には線刻で絵が描かれるようになるなど、集落の祭りに欠かせないシンボルとなりました。
問5	答え 1 銅矛	銅矛は、九州地方で出土することが多い青銅製の武器型祭器です。これらは実際に戦いで使う武器というよりは、葬儀や祭祀の場で神を祀ったり、亡くなった首長の権力を誇示したりするための道具として副葬されました。
問6	答え 4 志賀島	福岡県の志賀島で、農作業の最中に石の間から金印が発見されたと伝えられています。金印には「漢委奴国王」という文字が刻まれており、これがかつて中国の皇帝から授けられたものと結びつけられました。
問7	答え 3 銅鐸	銅鐸は青銅製の釣鐘状の道具で、当初は小型でしたが、次第に大型化しました。表面には稲作の様子や動物、自然などの絵が描かれることもあり、当時の人々の信仰心や芸術性を伝えています。
問8	答え 2 銅鐸	銅鐸は、主に近畿地方を中心に分布しており、弥生時代の村の共同体で行われる祭りや儀式に使われたと考えられています。初めは小型で実際に鳴らしていましたが、時代が進むにつれて大型化し、文様が描かれるようになり、神聖な祭器として祭りの場に立てられたり、埋められたりしました。
問9	答え 4 漢鏡	漢鏡は、中国の漢王朝で鑄造された銅鏡で、高い鑄造技術による精巧な文様が特徴です。これらは日本の首長たちにとって、自身の権威を内外に示すための貴重な贈り物や財宝として大変珍重されました。
問10	答え 3 金印	1784年、福岡県の志賀島で農夫によって発見されました。印面には「漢委奴国王（かんのわのなのこくおう）」と刻まれており、中国の後漢書にある記述と一致します。これは、当時の日本が既に中国の皇帝から「王」として認められる外交交渉を行っていたことを裏付けています。
問11	答え 1 ローマ帝国	ローマ帝国は、地中海沿岸の全域を支配下に置き、高度な法整備や道路網、水道技術などを有していました。同時期のアジアの中国やインドとも間接的な交易関係があり、広い範囲で交流が行われていました。
問12	答え 4 吉野ヶ里遺跡	吉野ヶ里遺跡は、周囲に深い堀（環濠）を巡らせ、外敵の侵入を防ぐ構造を持つ大規模な集落跡です。敷地内には高床倉庫や物見やぐら、王の住居と見られる建物などが再現されています。
問13	答え 3 小国	当時の日本は「百余りの小国」に分かれていたと『後漢書』などに記されています。これらの小国は、豊かな水田地帯を支配する有力者（首長）を中心に組織され、ときには他の集落や小国と水や土地をめぐる激しく争いました。
問14	答え 4 後漢	57年、九州の奴国の使者が中国の王朝である後漢の皇帝を訪れ、朝貢を行いました。当時の皇帝である光武帝は、その使いに対して「漢委奴国王」と刻まれた金印を贈りました。
問15	答え 4 後漢	志賀島で発見された「漢委奴国王」と刻まれた金印は、1世紀頃、後漢の光武帝が日本の使者に授けたものと考えられています。これは日本が中国の王朝から外交上の承認を得ていたことを示す重要な証拠です。